



全国公立学校教頭会通信 4号

きずな

発行 令和4年10月17日

全国公立学校教頭会広報部

電話： 03-3436-4868

Mail： zenkokyo@kyotokai.jp

HP： <http://www.kyotokai.jp>

令和4年度 第55回北海道ブロック研究大会 小樽大会 9月16日（金）



【日程・大会の概要】

(1) 日程

○開会式 ○研究発表 ○記念講演会 ○分科会

(2) 概要

○研究主題

「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」

～夢をもち未来を創り出す力を育む 活力ある学校づくりの推進～

○趣旨

令和4年度は北海道公立学校教頭会研究主題第15次3か年継続研究の2年次（最終年次）になります。これまでの成果と課題を受け、子ども一人一人に豊かな人間性を育むために、学校・地域・保護者との連携をさらに深め、信頼される学校づくりの推進を通し、教頭としてどのようにかかわったかを重点に研究推進を図ります。「代表参加制」や「分科会のグループ協議」の継続により、さらに研修の充実・発展を目指します。各地区教頭会の実践を交流し、具体的な研修内容から得た成果を各地区に還元するための貴重な場として、本研究大会を開催するものです。（小樽大会開催要項より）

○記念講演

講師：新保 元康 氏（認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長）

演題：「北海道の未来を創る教頭へのエール ～『樽橋』のエネルギーを今こそ～

【小樽大会に参加して 全国公立学校教頭会 広報部】

記念講演では、新保元康氏からこれから求められる学校の形や学校のリーダーに求められる資質などについて、貴重なお話をいただきました。その中から、副校長・教頭として現場で生かせる言葉を紹介します。

- 優れた教頭がいた。その教頭は日に50回、校長に報告。職員室で教員から教頭へ相談があり、「そうだね、そうだね、それでいいと思います。」と受け、「大丈夫だと思うけど、ちょっと校長先生に確認しますね」と告げ、すぐに校長室に行って確認。職員室に戻り、「大丈夫でした。お願いします。」と伝える。管理職の考えや方向性がずれることが無かった。
- 校長の確認を取らないで物事を進めていないか。私が先輩教頭から「全部、校長に聞きなさい。校長が『聞きに来なくていい』と言われたら、自分で判断してやりなさい。」と教わった。
- 校長も所詮は中間管理職。企業で言う課長。しかし、学校の教育課程は、学校が主体で作る権限がある。そこについては強くいっていい。
- 「損して得をとる」「負けるが勝ち」。この立場は何回も負ける。負けないといけないこともある。個人としては負けつつ、全体としての勝ちにつなげるのが大切。
- 自分なりの自己調整を保つ重要性。パチンコが趣味の人はパチンコでもよし。おすすめは、友達を अच्छこちに作ること。この問題はこの人に相談しよう、あの問題はあの人に相談しようという、聞いてもらえる人、相談できる人をたくさん作る。私も人に助けてもらった。
- 日本はこのままでいいのか。（日本の土地が外資に買われる現状を見て）日本の主人公は日本の子どもたち。そのために社会に開かれた教育課程が必要。その中心となるのが教頭。そして、学校自体が元気でないといけない。だから、働き方改革が必要。日常を変える。ICTで。

- 地方創生には、学校の力が何としても大事。地方創生に学校も参加する。各地域に合ったカリキュラムを学校が作る。
- DX は ICT の活用ではない。社会の構造自体の変化を意味する。ライフスタイルが変わることであり、日常が変わること。そして、日常の質が上がるということ。新しい価値の創造であり、新しい日常の創造。
- ICT やちょっとした工夫で、日常を変えていく。Google フォームでの欠席連絡は便利。職員室のスペースにスタンディングデスクを設置しお菓子を置くだけで、職員の話合いが自然と生まれる。棚の引戸を外すことも工夫の一つで、棚の中がすぐにわかり、取り出しもすぐにでき、時短に繋がる。百円ショップをヒントにした文房具の整理で印刷室のデッドスペースを活用できる。アドレスフリーの職員室の学校もある。全教室の教卓・タブレット・実物投影機・接続コードが同じ位置に配置されていて、誰が補教に入っても授業のストレスが生じない。
- 成功している GIGA スクールは、形にこだわらずトライしているところ。やってみないと分からない。失敗も共有。
- 物事の成長には「恐怖ゾーン」がある。リーダーは教職員が「恐怖ゾーン」を共有し、着実にステップさせ、学校外の力も借りながら乗り越えさせる。
- これまでの「いい授業」「いい仕事」が変わる。ゼロベースの思考。指導案は「厚み」に尊厳があったが、今後は「薄ければ薄いほどいい」となる。「自分だけの教材」が「みんなの教材（共有）」になる。
- 次世代に苦しみを残さないためにも、変えていく勇気を。どうかご機嫌よく。

【分科会 グループ協議の柱】

分科会		研究課題	討議の柱
第1課題	第1分科会 A	教育課程に関する課題	教頭としてカリキュラム・マネジメントを軸とした学校改善と教育課程の評価、改善にどのように取り組んでいくか。
	第1分科会 B	教育課程に関する課題	信頼される学校づくりに資する、「社会に開かれた教育課程」の編成・実施と人材の育成に教頭としてどのように推進していくか。
第2課題	第2分科会	子どもの発達に関する課題	学力向上に向けた組織マネジメントの強化や、小中一貫教育を進めていく上での教育課程の編成を教頭としてどのように推進していくか。
第3課題	第3分科会	教育環境整備に関する課題	未来を生きる力を育む活力ある学校を目指し、ICT 活用の充実をはじめとした教育環境の整備を組織的に推進するために、教頭の関わりはどうあるべきか。
第4課題	第4分科会	組織・運営に関する課題	子どもの学びを保障するために ICT 機器等の活用とマネジメントを教頭として同推進していくか。
第5課題	第5分科会 A	教職員の専門性に関する課題	学校運営参画意識や組織力を向上させ、学校運営の活性化を図ったり教職員の指導力を高めたりするために教頭の関わりはどうあるべきか。
	第5分科会 B	教職員の専門性に関する課題	外部人材や ICT の効果的な活用等、教職員の授業改善を目指した組織的な取組や学校・家庭・地域社会等と連携を活かせる教職員の育成に教頭の指導性はどうか。
特別分科会		教育の今日的な課題	コミュニティ・スクール制度の現状と課題をどのようにとらえ、教頭の関わりはどうあるべきか。